

第 66 回 SGRA-V フォーラム  
第 6 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性  
「人の移動と境界・権力・民族」

日 時：2021 年 9 月 11 日（土）午前 10 時～午後 4 時 20 分（日本時間）

方 法： オンライン（Zoom Webinar による）

主 催： 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

### ■開催の趣旨

本「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として 2016 年に始まり、これまで全 5 回を開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や、個別の実証研究をめぐって、議論と交流を深めてきた。第 5 回は新型コロナ流行下でも対話を継続すべく、初のオンライン開催を試み、多くの参加者から興味深い発言が得られたが、討論時間が短く、やや消化不良の印象を残した。今回はやや実験的に、自由な討論に十分な時間を割くことを主眼に、思い切った大きなテーマを掲げた。問題提起と若干のコメントを皮切りに、国や地域、時代を超えて議論を豊かに展開し、これまで広がってきた参加者の輪の連帯を一層深めたい。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。フォーラム終了後は講演録（SGRA レポート）を作成し、参加者によるエッセイ等をメールマガジン等で広く社会に発信する。

### ■問題提起

塩出浩之（京都大学）「人の移動から見る近代日本：国境・国籍・民族」

国や地域をまたいで移動する人々は、過去から今日まで普遍的に存在してきた。しかし歴史が国家を単位とし、かつ国民の歴史として書かれるとき、彼らの経験は歴史から抜け落ちる。逆にいえば、歴史をめぐる対話において、人の移動はもっとも好適な話題の一つになりうるといえよう。

「人の移動と境界・権力・民族」というテーマについて、この問題提起では近代日本の経験を素材として論点を提示する。まず導入として、アメリカ合衆国の沖縄系コミュニティに関する報告者のフィールドワークをもとに、現代世界における民族集団（ethnic group）について概観する。

第一の問題提起として、近現代における人の移動を左右してきた国境と国籍に焦点をあて、具体的な事例として、20 世紀前半における日本統治下の沖縄・朝鮮や、戦後アメリカ統治下の沖縄からの移民について紹介する。国境や国籍が、近現代の主権国家体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接に関わることを指摘したい。

第二の問題提起として、人の移動が政治・社会秩序に果たしたインパクトとして、国家や地域をまたぐ民族集団の形成、そして国家間関係とは異なる民族間関係の形成に焦点をあてる。具体的な事例としては、20 世紀前半のハワイにおける日系住民と中国系住民の複雑な関係についてとりあげる。

以上を踏まえて、近現代における人の移動は前近代とどのような異同があり、また国を単位として比較した場合には何がいえるのか、議論を喚起したい。

■プログラム

第1セッション (10:00-11:25) 総合司会：李 恩民 (桜美林大学)				
	開会の趣旨	10分	村 和明	東京大学
	問題提起	30分	塩出浩之	京都大学
韓国	指定討論	10分	趙 阮	釜山大学
中国	指定討論	10分	張 佳	復旦大学
日本	指定討論	10分	榎本 渉	国際日本文化研究センター
—休憩5分—				
第2セッション (11:30-12:45) 司会：南 基正 (ソウル大学)				
韓国	指定討論	10分	韓 成敏	世宗大学
中国	指定討論	10分	秦 方	首都師範大学
日本	指定討論	10分	大久保健晴	慶應義塾大学
	コメント	10分	塩出浩之	京都大学
	自由討論	約30分	講師と指定討論者	
—休憩45分—				
第3セッション (13:30-14:45) 司会：彭 浩 (大阪市立大学)、鄭 淳一 (高麗大学)				
	論点整理	10分	劉 傑	早稲田大学
	自由討論	約60分	パネリスト (国史対話プロジェクト参加者) 市川智生 (沖縄国際大学)、大川 真 (中央大学)、 佐藤雄基 (立教大学)、平山 昇 (神奈川大学)、 浅野豊美 (早稲田大学)、沈 哲基 (延世大学)、 南 基玄 (韓国独立記念館)、金キョンテ (全南大学)、 王 耀振 (天津外国語大学)、孫 継強 (蘇州大学)	
—休憩5分—				
第4セッション (14:50-16:20) 司会：彭 浩 (大阪市立大学)、鄭 淳一 (高麗大学)				
	自由討論	約60分	パネリスト (国史対話プロジェクト参加者) 市川智生 (沖縄国際大学)、大川 真 (中央大学)、 佐藤雄基 (立教大学)、平山 昇 (神奈川大学)、 浅野豊美 (早稲田大学)、沈 哲基 (延世大学)、 南 基玄 (韓国独立記念館)、金キョンテ (全南大学)、 王 耀振 (天津外国語大学)、孫 継強 (蘇州大学)	
	総括	10分	宋 志勇	南開大学
		10分	三谷 博	東京大学名誉教授
	閉会挨拶	5分	趙 珖	高麗大学名誉教授
	同時通訳	韓国語⇔日本語：李 へリ (韓国外国語大学)、安ヨンヒ (韓国外国語大学) 日本語⇔中国語：丁 莉 (北京外国語大学)、宋 剛 (北京外国語大学) 中国語⇔韓国語：金 丹実 (フリーランス)、朴 賢 (京都大学)		

## ■「国史たちの対話」プロジェクトの経緯

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先生(高麗大学名誉教授)の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月北九州にて、日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は「『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、如何に対応策を用意したかを見、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な討論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはZoomウェビナーというプラットフォームを得ることとなり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

3か国語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図る。

## ■国史たちの対話レポートバックナンバー

第1回国史対話レポート「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/8730/>

第2回国史対話レポート「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/10611/>

第3回国史対話レポート「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2018/14261/>

第4回国史対話レポート「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2020/15991/>

■メールマガジンのバックナンバー

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>